

No. **12**
2003.Sep.

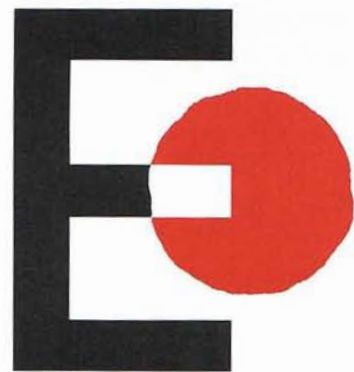


2003年 イベント学会研究大会 総会

～21世紀イベントの可能性を探る～

CONTENTS

- ◆特別講演…………… P2～3
『単なる展覧会から総合的体験型アート・イベントへ』岩淵潤子
- ◆研究発表…………… P4～5
『江戸の元気印を現代に…神田祭の事例』清水祥彦
『足利まちづくりイベントの系譜と足利買場』赤間透
『ブロードウェイのビジネスモデル』茂木崇
『誰も考えなかったイベント証券化への挑戦』亀田卓
- ◆シンポジウム…………… P6～7
『21世紀イベントの可能性を探る～4つの論点について～』
- ◆2003年度総会報告…………… P8～9
- ◆学会員リレーエッセイ『イベント雑感』…………… P10～11



イベント学会会報「イベントロジー」
EVENTOLOGY

2003年度研究大会・総会プログラム

2003年6月30日、イベント学会2003年度研究大会が、順天堂大学御茶ノ水校有山記念講堂で開催された。今回のテーマは「21世紀イベントの可能性を探る」。伝統的な祭とイベントの未来、まちづくりとイベント、イベント証券化について等、多様な論点で、発表がなされた。

10:30 開会挨拶

望月照彦 大会実行委員長 多摩大学教授

10:40 特別講演

『単なる展覧会から総合的体験型アート・イベントへ』

岩淵潤子 静岡文化芸術大学助教授

11:30 研究発表-1~文化①~

『江戸の元氣印を現代に…神田祭の事例』

清水祥彦 神田神社権禰宣

13:00 研究発表-2~文化②~

『足利まちづくりイベントの系譜と足利買場』

赤間透 足利まちづくり(株)代表取締役

13:35 研究発表-3~経済①~

『ブロードウェイのビジネスモデル』

茂木崇 東京工芸大学専任講師

14:10 研究発表-4~経済②~

『誰も考えなかったイベント証券化への挑戦』

亀田卓 (株)電通エンタテインメント事業局

15:00 シンポジウム

『21世紀イベントの可能性を探る

~4つの論点について~』

【コーディネーター】宮本宗治

(社)日本イベント産業振興協会 調査研究本部長

【パネリスト】

赤間透 足利まちづくり(株)代表取締役

茂木崇 東京工芸大学専任講師

亀田卓 (株)電通エンタテインメント事業局

16:00 閉会

16:10 2003年度年次総会

【議長】堺屋太一 イベント学会会長

17:00 懇親会

18:00 散会

イベント学会とは

イベント研究者のみならず、さまざまな分野の研究者、技術者、専門家や実務者が経験や知識の多少にかかわらず参加し、積極的な相互作用を通じて「異質な知と技能のメルティング・ポット(るつぼ)」となる学会です。

多様な専門、異なった立場から提示される知識、ノウハウ、経験がときに競合し、干渉しあい、やがてそれらが共鳴・交響して、創造的に共同成果を生み出すような機会と場を創り出すこと、それこそがわれわれのめざす新しい学会です。

特別講演

岩淵潤子氏

【いわぶち じゅんこ】

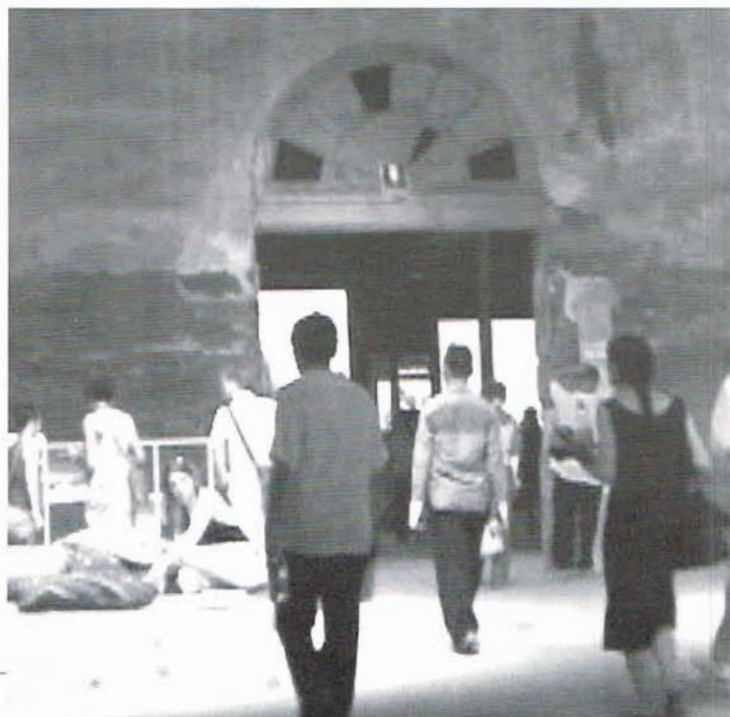
静岡文化芸術大学文化政策学部助教授。'83年カリフォルニア美術工芸大学卒。'85年、同大学大学院修士課程修了。ホイットニー美術館に給付研究員として在籍後、国際ロータリー財団奨学生としてフィレンツェに留学。'94~'96年、英国エセックス大学大学院博士課程在籍。慶應義塾大学文学部、立教大学大学院講師などを務める。

単なる展覧会から総

~マネジメント、周辺産業との

文化・芸術は、経済を活性化し、外貨を獲得する大きな原動力となる可能性を秘めています。芸術そのもので儲けるわけではありません。芸術を取り巻く都市インフラを活性化し、芸術を資源として周辺産業が潤う仕組みを構築すること。これが、“産業化する芸術”の概念であり、文化が経済力をgenerateできる最も有効な方法だと考えます。

美術館や博物館で開催される展覧会は、鑑賞者が極めて受動的にこれらを体験する旧来的な芸術鑑賞の方法です。しかし、例えば「ヴェネツィア・ビエンナーレ」や「アート・バーゼル」などのアート・イベントは、複数の会場があり、鑑賞者は強制的に街を回遊せざるをえない状況に置かれます。もちろん、回遊ルートは主催者側が周到に計画したものです。鑑賞者は、その土地の気候風土や歴史・文化、飲



優れた芸術、文化施設と周辺産業、
公共のインフラ。
これら全てが連携することにより、
初めて経済効果を伴うイベントが成立する



合的体験アート・イベントへ コラボレーションという視点から見た文化の経済力～

食、人々との交流を体験しながら、野外を含む広範な地域に展開されている多様なプログラムを、主体的に参加して楽しむわけです。

このようなアート・イベントは“Global Art Experience Events”と呼ばれており、そこに必要なのが“CEO”です。この場合の“CEO”とは、“Cultural Experience Organizers”、又は“Cultural Experience Orchestrators”。オーケストラが複数の旋律・パートが集まる事によって豊かな音を醸し出すように、“CEO”は来場者の文化的な体験をorchestrateするわけです。

アート・イベントの予算規模は「ヴェネツィア・ビエンナーレ」で約700万ドル、ドイツの「ドクメンタ」で約1000万ドルと大事業化しています。投資に見合った見返りがなければ

成立しえない。このため“CEO”には、高度なコミュニケーション能力やプロジェクト・マネジメント能力など、企業経営者並みのビジネス・スキルが求められます。

アート・イベントを行なう上で重要なのは、都市の資源を全て活用することです。日本の場合、ホテルや飲食、娯楽施設、交通網、人的資源のファクターが非常に弱い。“Global Art Experience Events”は、全てが一流であってこそ、絶大な効果が生まれるもの。日本でも、不足している部分が多々あることを忘れず、危機意識を持つことで周辺産業の潜在能力を高めていく必要があります。これにより、我が国でも国際的な集客力を持つ“Global Art Experience Events”の開催が可能になるわけです。



▲ヴェネツィア・ビエンナーレのメイン会場「ジャルディーニ」のエントランス

◀ヴェネツィア・ビエンナーレのオフィシャル会場のひとつ「アルセナーレ（旧海軍造兵廠）」。欧米ではイベントのためにわざわざ施設を作ることは少ない



▲アート・バーゼル・メイン会場。時計下に展示された彫刻は数トンの重さだが、このイベントのためにニューヨークから運ばれた



▲アート・バーゼルのコレクターズラウンジで供されていた「缶入り」寿司

研究発表1

清水 祥彦 氏

江戸の元気印を現代に…神田祭の事例

神田は、秋葉原の電気街をはじめ、スポーツ用品街、古本屋街、繊維街、薬品問屋街など、様々な魅力を持つ街。しかし、「神田」という街全体では、うまく魅力を表現できていない。それをどうするかが、江戸開府400年に当たる今年の神田祭のコンセプトでした。

たとえば、神輿を船で運ぶ「船渡御」を復活させることで、水辺と街が分断された現代の都市づくりへの再考を促しました。また、江戸の学者の交流の場だったことに因んだ「明神塾」もスタート。IT時代を意識し、HP上で写真コンテストや祭の生中継をすると、一週間で450万アクセスがありました。



▲2001年から130年ぶりに曳物が復活。巨大な鶴の曳物を制作したのは芸大学生。今年は底抜屋台も復活

かつて神田祭は、浦島太郎など物語をテーマにした華やかなパレードがあった。ディズニーランド以上のパフォーマンスを持っていたのです。祭と連動したイベントはビジネスとして成功する可能性は高い。神社というフレームを使い、祭とリンクさせた「日本を元気にするイベント」を、ぜひ、企業の方々などに開催していただきたいと思っています。

【しみず・よしひこ】

神田神社権禰宣。1983年鶴岡八幡宮奉職、1987年神田神社奉職。日本神社総覧神田神社頁執筆（新人物往来社）。江戸開府400年記念神田祭KIXプロジェクト委員、明神塾実行委員会主宰、神道宗教学会会員

研究発表2

赤間 透 氏

約15年間、足利青年会議所に所属しながら、地元根ざしたイベントに携わってきました。

さらに'99年からは「中心市街地のまちづくり」という目標を設定。そのためのイベントを仕掛けようと「足利まちづくり株式会社」「NPO足利まちづくりセンター」の二つを立ち上げました。株式会社ではリスクを背負った経済活動で目標の実現をめざす。NPOでは間口を広げ、多様な人々のアイデアを盛り込もうというわけです。



▲2000年11月3日から67日間に渡って設置された「足利買場」。市の中心部にあった十字屋デパート跡地に、100年前の足利の賑わいを再現した

両者がマネジメントしたのが「足利買場」。100年前の足利の町を再現した「買場」という空間を創造。地元の製造業者にアンテナショップを出展してもらいました。地域の資源に気づき、それを活かすことで、まちづくりの起爆剤にしようと考えたのです。67日間で、14万人を集めました。

実は今から100年前というのは、足利が繊維の町として栄えた頃。その繁栄を元に20代の青年たちが「足利友愛義団」を結成し、都市基盤整備や市民のモラル、教育水準の向上に寄与しました。そしてコミュニティの質が上がり、さらに地場の産業が伸びた…。この好循環を21世紀の中で作り上げることが、私たちの使命であり、今後イベントまちづくりを考える上で重要だと考えます。

【あかま・とおる】

足利まちづくり(株)代表取締役。1984年(株)アカネ建設入社。1987年(株)アカネ企画設立、専務取締役。1999年足利まちづくり(株)設立。NPO法人足利まちづくりセンター副会長。モダンズム遺産活用等を念頭に、まちづくりを先導

足利まちづくりイベントの系譜と足利買場



研究発表3

茂木 崇 氏

ブロードウェイのビジネスモデル

ブロードウェイの合言葉は‘MAKE MONEY’。「優れた作品は利益を生む」という発想で動いています。とはいえ、現実には5本に4本は失敗する博打性の高いベンチャービジネスです。

このビジネスをスタートさせるのが、プロデューサーです。彼らの仕事は3つ。「制作資金を集めること」「劇場を確保すること」そして「すべての人物を束ね、利益を出すこと」です。

現在、ミュージカル制作には約10億円かかるといわれています。しかし、成功確率は5分の1ですので銀行融資は無理。そこで、リミテッド・パートナーシップで出資を募るのが普通です。この方式は、ベンチャービジネスにおける標準的なファイナンスの手法で、シリコンバレーでも活用されています。現在のブロードウェイの相場は一口2000万円で有限責任。これを50口集めるわけです。当たれば配当が出ますが、外れれば当然ゼロです。



▲2002~03年シーズンは、ブロードウェイ全体で7億ドルの興行収入を得た

「当たるも当たらずも分からない」という前提でファイナンスできるのがブロードウェイの強みです。日本でイベントの発展を考える際にも、こうした考え方、ファイナンスのシステムを参考にすべきではないでしょうか。

【もぎ・たかし】

東京工芸大学工学部専任講師。2001年東京大学大学院人文社会系研究科社会情報学専門分野博士課程単位取得満期退学。NYをエリアスタディし、ブロードウェイの演劇制作やニューヨークタイムズの報道姿勢などに関する研究を手がけている。

研究発表4

亀田 卓 氏

米国の歌手ベビーフェイスの日本公演、日韓W杯のパブリックビューイング、日中国交正常化記念イベント…。これらを通じてイベントの“証券化”を日本で初めて実施しました。

「イベントの証券化」とはイベントの費用を、複数の投資家から小口で募集。利回りをチケットの売上等に連動させ、投資家に利益を還元する仕組みです。投資家には「ハイリターンへの期待」「他の金融商品より分かりやすい」「パトロンージュ気分が味わえる」、制作者は「前払い金が調達できる」「新しい試みに挑戦しやすい」等の利点があります。

■「イベント証券化」成功の流れ■

※日韓W杯のパブリックビューイング

イベントの運営費用は2億円必要が、キャッシュフローから2000万円あれば足りる

1口250万円×8口(計2000万円)を私募
利回りはチケットの売上枚数によって変動
(定員は日本戦3戦で15万人・損益分岐点は11万3000人)

投資家は集まり、イベントも成功!
(ロシア、チュニジア戦は前売りチケットが完売。
3戦でトータル14万人が来場)

投資家はハイリターンを獲得
(利回りは1カ月半で7.05%!)
制作サイドは自己資金をかけずにイベント運営を成功

前例がないため、スキームづくりに苦労しましたが、完成させる事ができました。また「ベビー〜」と「パブリック〜」では、非常に高い利回りを投資家に実現させる事ができました。

課題はありますが、才能ある制作者にチャンスを与えられるし、とっつきやすいので間接金融から直接金融への流れを後押しできます。また、多くの投資家を募れば、彼らがそのイベントの盛り上げ役を果たすことも期待できます。証券化することで、イベント自体が盛り上がる。上手く利用すれば、そんな仕組みが作れるのではないのでしょうか。

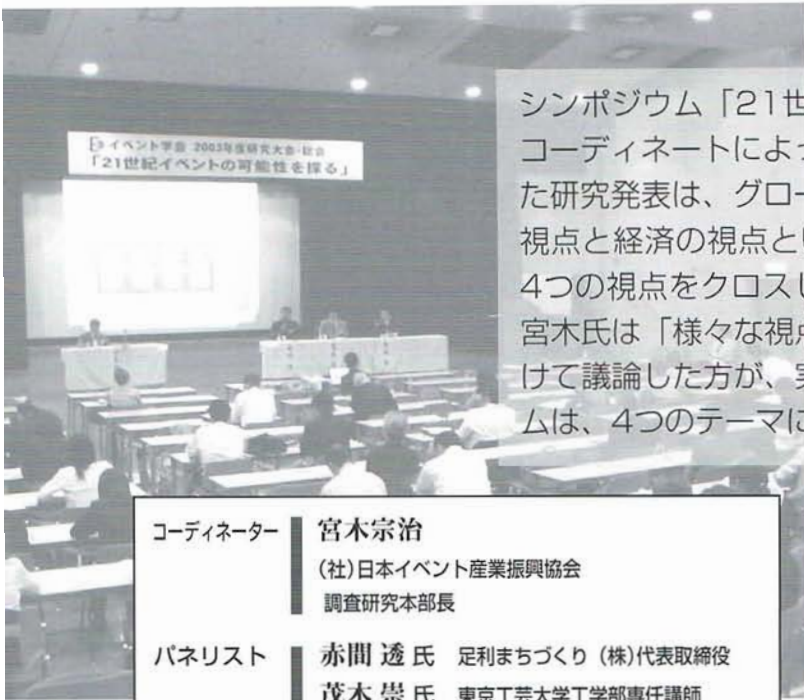
【かめだ・たかし】

(株)電通エンタテインメント事業局所属。1984年電通に入社し、テレビの仕事を中心に、コンテンツビジネスに関わった後金融関係の業務に携わる。2001年、出向の形で、東京ファイナンス・アンドエンタテインメントを設立し、イベント証券化事業に取り組む。

誰も考えなかつたイベント証券化への挑戦

21世紀イベントの可能性をさぐる

～4つの論点について～



シンポジウム「21世紀イベントの可能性を探る」は、宮木宗治氏のコーディネートによって進められた。シンポジウムに先立って行われた研究発表は、グローバルな視点とローカルな視点、さらに、文化の視点と経済の視点といった4つの視点からのアプローチが行われた。4つの視点をクロスしたところに新たな発見が生まれそうだと、宮木氏は「様々な視点を一つの話にまとめるよりも、テーマごとに分けて議論した方が、実りある結論を引き出せる」と提案。シンポジウムは、4つのテーマに分けて議論した。

コーディネーター	宮木宗治 (社)日本イベント産業振興協会 調査研究本部長
パネリスト	赤間透氏 足利まちづくり(株)代表取締役 茂木崇氏 東京工芸大学工学部専任講師 亀田卓氏 (株)電通エンタテインメント事業局

1 論点

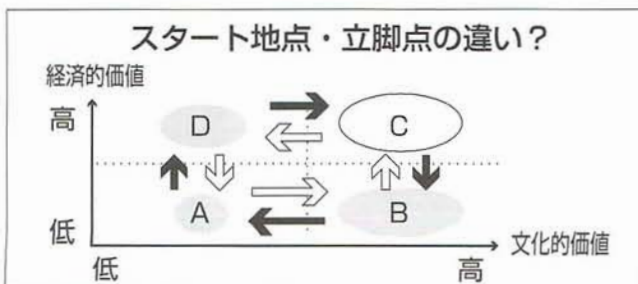
「イベント」と「祭」と「興行」この3者の違いは何か？

～文化的側面と経済的側面から再検討する

宮木 興行は、まず儲けなくてはならないというスタンスがあるが、イベントや祭は、どちらかというと自然発生的。よって立つスタンスが違うのではないかと。

茂木 確かに、興行では儲けなければいけない。ブロードウェイの興行では、'The show must go on'、何があっても上演されなければならないという言葉がある。たとえ主演が病気になっても、代役が立てられ、何事もなかったように続く。

亀田 祭も興行もイベントの一種。ただし、入場料が目的の興行は、観客の有無が大切だが、祭やオリンピックは必ずしもそうではない。ここが明快に違う。



これまでは、経済的価値に視点を置いたイベントと文化的価値に視点を置いたイベントに二極化。今後は、両面を意識したイベントを考えるべき

2 論点

地域活性化の担い手は誰なのか。

～プロデューサーの役割について再検討する

宮木 「はじめに企画ありき」「資金を集める人」「実施に関する営業」…。プロデューサーに対するイメージは様々だが、本来は「全権を握ってマネジメントする」ことが、プロデューサーの役割だと思うが。

赤間 地域の人々に多様な価値観やニーズがあるのは当然。しかし、その前に、全てを超越するような街独自の価値観を街全体で共有することが必要。それをマザーシップにたとえれば、船を導くための思想を理解できる人がプロデューサーだと思う。

茂木 ブロードウェイでは、プロデューサーが資金を集めるために、脚本が3～4割しか完成していない段階で、バックステージオーディションという投資家向けのオーディションを開催する。スターにピアノだけで2～3曲歌わせて、良ければ2000～3000万円出してくれと勧誘する。こんな投資家達を束ねるプロデューサーも、最近は、サラリーマン化。1人が1つの芝居ではなく、10人くらいのプロデューサーで仕切ようになった。安全志向が高くなったのかもしれない。

懇親会

研究大会、年次総会終了後、有山記念講堂地下1階レストランで、恒例の懇親会が開催されました。堺屋太一イベント学会会長の挨拶、成田豊イベント学会理事長の乾杯でスタート。聴講していた大学生も参加し、世代を超えて盛り上がる楽しい会となりました。

プロデューサーの役割と機能再考



プロデューサーは全権を掌握できるか否かが鍵に

3 論点

イベントの評価尺度は、何を第1優先すべきか。

～費用対効果とは・感動指標と経済指標、
長期的視点と短期的視点について

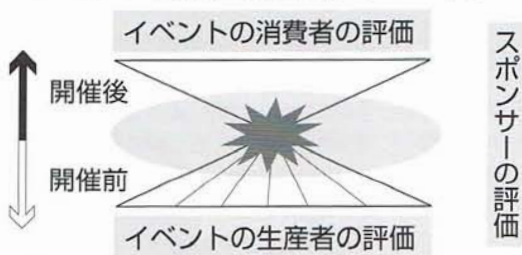
宮木 現在では、イベントが増加の一途。多様化し、また様々なことがイベント化している。こうした中、個々のイベントに対する評価、いわば感動指標のようなものが必要なのではないか。

亀田 評価の前に「何のためにイベントをやったか」という目的が大切。儲けるためにやったなら、収益が成否の尺度になるし、祭のように信心を行うことが目的なら、きちんと執り行われたかが評価の対象になる。イベントの目的によって評価尺度が変わるはず。

茂木 近年、数値による評価が盛んだが、数字を重視しすぎると、どんな文化をつくらうとしているのかという肝心の視点が消えてしまう。アイデアが無い人が数字を振り回すのは厳に慎むべきだ。

赤間 地域でイベントを継続するのは難しいが、たとえ単発のイベントでも、その後のイベントに何らかの関連性を残すことだと思う。形が変わっても、何かしらの新しい町づくりの芽が生まれて継続されれば、それは成功。やりっぱなしが一番いけない。

イベントの評価は立場によって異なる



多様化、増加するイベント。粗製濫造を防止し、良質なイベントを作るには多面的な評価基準が必要

■ 乾杯の音頭をとる成田理事長



■ グラス片手にざっくばらんに語り合う会員たち

■ 堺屋会長を囲んで……。若い学生達にとつては、特に有意義な場になった



4 論点

イベントによる産業振興は可能か。

～経済構造、社会構造の変化がイベントの仕組みに
変化を及ぼすか、再度提言を含めて予測する

宮木 継続するイベントもあれば、一回で終わるイベント、記念大会でマンネリから脱却したイベント…。イベントにも、商品と同様、導入期・成長期・成熟期・衰退期というプロダクトライフサイクルの考え方が必要かもしれない。

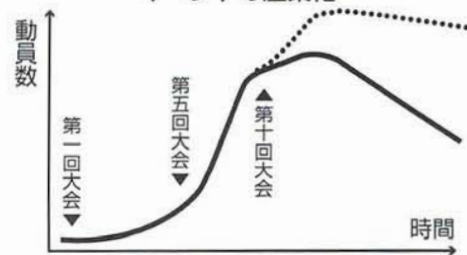
茂木 『ニューヨーク・タイムズ』では、政治経済の担当でも舞台や美術館によく足を運んでいる記者が少なくない。そうして、人間の心理や社会のあり方を内省しているので、優れた分析記事が書けるようになっている。そのような感性を養う場としてイベントは有効。だが日本では、特に男性が、イベントに対してそのような接し方をしていない。

赤間 イベントは、新しい社会の基盤づくりのきっかけになる。イベントによって地域の知識や技術を束ねれば、産業構造の転換に貢献できる。特に、環境先進都市のような、高邁な思想を必要とする21世紀型の都市に転換するためには効果的。

亀田 金融業界とエンターテインメント業界が、同じ言語で話ができるようになれば、ビジネス的にもイベントは繁栄していく。

宮木 景気が沈滞している現在、イベントは人々が元気を出す手段。一方、イベントが日常的になっている現在、個々のイベントに「人々が、何を望んでいるか」を吸い上げる観点も必要になるだろう。

イベントのプロダクトライフサイクル —イベントの産業化—



継続イベントには、導入期、成長期、成熟期、衰退期の考え方が必要

2003年度総会報告

6月30日(月)、順天堂大学有山講堂で研究大会終了後、2003年度総会を開催しました。イベント学会は、1998年に設立されてから満5年になり、本年度はこれからのイベント学のあり方を探る上で、次のような記念事業を行うことを総会で決定しました。

2003年度活動計画

■イベント学会設立5周年記念事業実行委員会

委員長 堺屋 太一 イベント学会会長
副委員長 北本 正孟 イベント学会副会長

■設立5周年記念東京大会(詳細 右頁参照)

開催日 2003年11月12日(水)
会場 東京・汐留 電通ホール
テーマ 「イベント・オリエンテッド・ポリシー」

■イベント大学(詳細 12頁参照)

開催期間 2003年10月3日~12月5日(10回)
会場 東京・渋谷マークシティ 多摩大学大学院
テーマ 「地域経営とイベント学」

■記念出版

(仮題)『イベント・オリエンテッド・ポリシー』 堺屋 太一著
(仮題)『イベント学概論』 望月 照彦他共著

■新会員入会推進運動

- ◇わが国のそれぞれの分野を代表する法人(企業)、イベントを積極的に活用している法人(企業)など、30社を目標に入会を勧める。
- ◇イベントの領域に関係のある人、イベントの社会的効果を理解してほしい人、50人を目標に入会を勧める。

決算・予算

次の2002年度決算案および2003年度予算案を審議、承認されました。

科 目		2002年度決算	2003年度予算	科 目		2002年度決算	2003年度予算
I. 収入の部	会費収入 計	7,440,000	20,200,000	II. 支出の部	管理費 計	6,669,479	6,300,000
	事業収入 計	16,110,000	1,000,000		事業費 計	16,756,891	14,700,000
	雑収入	186	0		その他	0	0
	当期収入合計(A)	23,550,186	21,200,000		当期支出合計(C)	23,426,369	21,000,000
	前期繰越収支差額	▲ 64,002	59,815		当期収支差額(A-C)	123,817	200,000
収入合計(B)	23,486,184	21,259,815	次期繰越収支差額(B-C)	59,815	259,815		

役員人事

2002年度総会以降、理事会において承認された間宮聰夫副会長、乃村義博副理事長、森隆一副理事長の選任が承認されました。その結果、2003年度イベント学会役員は下表の通りです(任期は2004年度総会まで)。

■イベント学会役員名簿

[法]は法人会員

役職名	氏名	所属・役職	理事	西原 寿之[法]	(株)日本イベント産業振興協会 常務理事
会長	堺屋 太一	(株)堺屋太一研究所 代表	理事	野川 春夫	順天堂大学スポーツ健康科学部 教授
理事長	成田 豊[法]	(株)電通 代表取締役会長	理事	野村 万之丞	(有)コースケ事務所 代表取締役
副会長	井関 利明	千葉商科大学政策情報学部 教授	理事	橋爪 紳也	大阪市立大学大学院 助教授
副会長	北本 正孟	(株)カントリー 代表取締役	理事	長谷川 文雄	東北芸術工科大学 副学長
副会長	間宮 聰夫	日本大学大学院 講師	理事	東新家 宏一	(社)公共広告機構 名古屋事務局長
副会長	望月 照彦	多摩大学教授 望月照彦研究所代表	理事	福川 伸次	(株)電通 顧問
副理事長	乃村 義博[法]	(株)乃村工務社 代表取締役社長	理事	藤江 俊彦	千葉商科大学政策情報学部 教授
副理事長	森 隆一	(株)電通 上席常務執行役員	理事	牧村 真史	(株)プレーン80 代表取締役
常務理事	川本 直彦	イベント学会 事務局長	理事	増田 隆昭	淑徳大学国際コミュニケーション学部 教授
理事	足立 直樹[法]	凸版印刷(株) 代表取締役社長	理事	松倉 崇	前日本イベント産業振興協会調査研究本部長
理事	稲垣 正夫[法]	(株)アサツーディ・ケイ 代表取締役会長	理事	マリ・クリスティーヌ	(有)エムキューブ 代表取締役社長
理事	内野 二郎	(株)ミュージックリーグ 会長	理事	宮川 智雄[法]	(株)博報堂 代表取締役社長
理事	北島 義俊[法]	大日本印刷(株) 代表取締役社長	理事	宮木 宗治	(社)日本イベント産業振興協会調査研究本部長
理事	久米 安雄[法]	ティーエスピー太陽(株) 代表取締役社長	理事	森下 慶子	(株)ケービー 代表取締役
理事	三枝 成彰	(株)メイコーポレーション 代表取締役	監事	園田 栄治	(株)インタープラン 代表取締役社長
理事	谷 喜久郎[法]	(株)新東通信 代表取締役会長			
理事	永利 久志[法]	(株)東急エージェンシー 代表取締役会長			

設立5周年記念東京大会

イベント学会の5年間の研究の総括と、21世紀におけるイベントの飛躍をめざし、堺屋太一会長みずからワークショップを指揮して、アジアの最新動向をも視野に入れた新しい視点からの挑戦をご披露しますので、ご期待下さい。

これまで、年次大会の会場は東京以外の都市ばかりで、在京の会員から不満も聞こえて来ましたが、今年は話題の東京・汐留、出来たばかりの電通新本社ビル・最新設備の大ホールを提供して頂き、地の利も得ての開催となりました。

なお、参加要項は10月上旬にお届けする予定ですので、今から予定にお入れ下さい。



■会場となる電通新本社ビル。東京・汐留のランドマークタワーだ

開催期日 2003年11月12日(水) 午前10時～午後6時
会場 東京・港区東新橋1-8-1 電通ホール
JR新橋駅 徒歩5分、営団地下鉄銀座線 新橋駅 徒歩8分
定員 200名(申込み先着順)
参加費 会員無料
テーマ 「イベント・オリエンテッド・ポリシー」～イベントの意義と効用～

プログラム

9:30	開場
10:00	開会
	基調講演 「イベント・オリエンテッド・ポリシー」 会長 堺屋 太一 ワークショップ
	発表1 「スポーツイベントの地域振興効果」(仮題)
	発表2 「音楽コンサートイベントの効果」(仮題)
	発表3 「イベントにおけるコンテンツファンドの効用」(仮題)
	特別報告 「2010上海万博について」(仮題)
	まとめ 「イベントのプロデュースと組織学」(仮題) 堺屋 太一
16:00	閉会
16:30	懇親会
18:00	散会

楽しみの経済学 『イベント・オリエンテッド・ポリシー』とは――

堺屋太一イベント学会会長が、昭和59年に著した幻の名著。

人類の究極の目的は楽しむこと。楽しいことがあれば、人は動き、文化や経済が発展し、都市が活性化する。昭和58年にスタートした「大阪21世紀計画」、「パンとサーカス」を唱えた古代ローマ、万国博覧会、オリンピック、楽市楽座…。古今東西の豊富な事例を織り交ぜて、イベント・オリエンテッド・ポリシー(行事誘導政策)の有効性を解説。

あれから19年。今、読み返せば、「プロデューサー不足」「知恵が価値を生む」といった言葉が実感として理解できる。海外旅行ブーム、バブル経済、リゾートブームなどを経て、ようやく会長の言う「イベント・オリエンテッド・ポリシーの効果」を感覚的に理解できる時代に入ったようだ。

そこでイベント学会では、設立5周年記念東京大会のテーマを『イベント・オリエンテッド・ポリシー』に決定した。

イベント雑感 第1回

イベントとは・論争のすすめ

宮木 宗治

今、私はイベント学会と日本イベント産業振興協会という二つの組織に片足ずつ突っ込み、結局、両足ともイベント関係にドブプリ漬かった日々を送っている。

イベント学会には設立準備段階から関わり、現在理事を、そして協会の方は、今年の3月に博報堂から出向し、現在、調査研究本部長をしている。

そこで、この半年に感じたこと、考えたことを雑感として記し、イベント学会各位の皆様方にとって恰好の餌食、論争の火種を撒き散らしたいと思っている。

まずは、ソモソモから始まる。そもそもイベント学会設立以降、これまでイベントについてまともな論争を戦わせた会員がどのくらいいたのだろうか。口角泡を飛ばすシーンをついぞ見たことがない。学会とは名ばかり、という言い過ぎであろうか。自戒をこめイベント学会創設の頃の情熱、今いづくに？ である。

実はこのような疑問を持つに至ったのは、理由がある。学会と協会のいずれもが今、設立以来の大きな曲がり角にさしかかっている。そのため内部の関係者の間では、毎日のように論争が繰り返されている。そして議論が白熱、盛り上がってくると必ず出る言葉、「こういうことを、本当はもっとちゃんとやらなくちゃ駄目なんだよね」

例えば、「イベントなんて言葉自体やめたら？」といった極端な意見から「博覧会なんてイベントのほんの一部に過ぎない。未だに博覧会からスタートするイベント論が大手を振っているのはおかしいよな」といった挑発的意見も飛び出してくる。

このように私の周りには、自問自答を含め、イベントってソモソモ何なんだ？ ジャパンエキスポ無き後の協会の存続意義は？ イベント学会は誰のためにあるのか？ 研究大会の参加率の低さは何なんだ？ 等々、次から次へと疑問、質問、意見、感想、雑感が飛び交う環境が生まれている。イベント学会は設立5周年、イベント産業振興協会は設立15周年、いずれも節目である。イベントの日常化、日常のイベント化が進む中で、もう一度、それぞれの組織設立の原点に立ち返る必要があるのかもしれない。



宮木宗治 (みやき・むねはる)

イベント学会・理事。(社)日本イベント産業振興協会・調査研究本部長。1973年(株)博報堂入社。マーケティング業務を担当。1998年博報堂・事業カンパニー・事業マーケティング部長。2003年日本イベント産業振興協会へ出向。現在に至る。

学会員が、イベントまたはイベント学に関して日々思うことを提言していく『イベント雑感』。
第1回目の今回は、イベント学会理事で、(社)日本イベント産業振興協会では調査研究本部長も務める宮木宗治氏より、「論争なきイベント学会」に対して辛口の提言をいただきました——

私自身は、近頃「川下発想からのイベント」に注目している。国や企業の思惑から離れた、一個人の楽しみや好奇心、あるいは使命感から発展し、やがてはグループ、組織、企業、自治体、国家、世界を巻き込み結び付けていくイベントに期待したい。これまでの行政を中心としたインフラ整備や企業利益を目的とした「川上発想からのイベント」に人々は、辟易しはじめている。「もういいかい?」「もういいよ!」といった声に耳を傾ける時代ではないのか。個人がワクワク・ドキドキできないイベントはやめた方がいい。

次に注目しているのは「イベントのソリューション機能」である。地球環境問題、コンピューターウィルス、エイズやSARS等、保健衛生医療に関わる問題のように全人類の叡智を集めなければ解決できないことがある。専門家集団の叡智が必要な課題、あるいはコラボレーションによって初めて解決方法が見つかる問題、そのような知恵の集約をスピーディーに大規模に実施できる手段としてのイベントに期待を持っている。

三番目は、「イベントの社会教育機能」である。リーダー不在、いじめ、ひきこもり、自殺大国等々、世の中が成熟期から衰退期に向かう兆候が随所に見られる。そのような時代状況の中で、イベントには、テーマもしくは目的次第で人々の心を繋ぐ力、繋ぎとめる力が内在している。プライベートなイベントから大規模なイベントに至るまで、スタートからゴールに至るプロセスは共通している。イベントに参加することで自らの役割への認識に目覚め、周りの人々とのかねあい・距離感を体得するチャンスが生まれる。かつては地域社会の中で培われた「まつり」が果たしていた社会教育的役割は、現代社会の中では「イベント」が担わなくてはならない時代になってきた。そのためには教育現場への「イベント教育」の浸透が急務だと思う。

四番目は、「イベントのマネジメント機能」のレベルアップ。イベントは、実施に至るまでは期間限定のプロジェクトチームとしてスタートする。プロジェクトリーダーが、お飾りではまずい。イベントでは、プロジェクトリーダーのことを、通常プロデューサーという言い方をするが、この力が弱い。全権を委任もしくは掌握していない名ばかりのプロデューサーが多い。メーカーが新製品開発に指名するプロジェクトリーダーの権限の大きさは、比較にならないほど立場が不安定だ。その理由の一つにプロデューサーの財務管理能力や資金調達能力、さらには人事管理能力まで含めた経営管理能力に問題があるからだ。これからのイベントプロデューサーは、マネジメント能力のレベルによって格付けが成される時代がやってくるに違いない。

以上、「近頃思うこと・勝手気ままに」でした。
今後、リレー形式で会員の皆様方に紙面を提供していく予定。次回、バトンタッチして頂ける方、奮ってご参加下さい。

『イベント雑感』への寄稿募集中

このコーナーでは、学会員のみなさまの寄稿を募集しております。「イベント学会への提言」「わたしとイベント」など、イベントまたはイベント学会に関してあなたが思われていることを2000字(400字詰め原稿用紙5枚)程度でまとめ、住所、氏名、年齢、電話番号を明記のうえ、下記の宛先までお送りください。なお、掲載文は一部手直しさせていただきます。ご了承ください。

宛先

〒102-0082
東京都千代田区一番町13 (一番町法眼坂ビル3F)
「イベント学会事務局・EVENTOLOGY」
「イベント雑感」係
FAXは 03-3238-7834

イベント大学『地域経営とイベント学』

多摩大学大学院と協力して「地域経営とイベント学」をテーマに、下記の内容で講座を開講しますので、ご希望の方はイベント学会事務局宛にお問い合わせ下さい。「イベント大学受講ガイド」をお送りします（9月初旬配送予定）。

開講期日 2003年10月3日～12月5日（10回）

毎週金曜日午後6時30分～8時40分

会場 東京・渋谷／マークシティ17階 多摩大学大学院ルネッサンスセンター
JR渋谷駅 徒歩5分、営団地下鉄 渋谷駅 徒歩5分

定員 15名（他に多摩大学大学院生が15名前後受講します）

受講料 4万円（10講座一括）、大学院生2万円

講座内容 講座主任 望月 照彦 多摩大学教授
テーマによってゲスト講師をお招きする予定です。

ゲスト講師（予定）

北本 正孟 （株）カントリー 代表取締役

黛 まどか 俳人

井関 利明 千葉商科大学 教授

市村 次夫 長野県・小布施町

他

「なぜ、いま地域経営とイベントか」

「イベント経済学の新世代」

「地域創造とイベント」

「イベントで創る21世紀」

「心の中のイベント」

「都心新生とイベント」

「北本正孟が語るイベントの21世紀」

「ブロードウェイの経営学(プロジェクトマネジメント)」

「メディア(媒介)としてのイベント」

「イベントは何を創れるか(総括シンポジウム)」

イベント学会入会手続き

- 1) 入会ご希望の方は、申込書（会員種別）にご記入の上イベント学会事務局あてご郵送下さい。
- 2) 申込者について理事会等で審議し、入会を承認された方には入会承認書と振込み案内をお送りしますので入会金（初年度のみ・準会員は不要）と年会費を指定の口座にお振込み下さい。
- 3) これ以降、会報『イベントロジー』や研究報告書、大会、部会などのご案内をお届けします。

■イベント学会会費一覧（2003年度/円）

会員種類	入会金	年会費	備考
1) 個人会員	5,000	10,000	個人
2) 準会員		2,000	大学生、大学院生、専門学校生など
3) 自治体会員	20,000	50,000	地方自治体
4) 法人会員（1口）	100,000	100,000	企業、団体などの法人